

ポストポリオ症候群

# ポリオ経験者の二次障害PPS

## 「頑張りすぎ」は逆効果

一九五〇～六〇年代に大流行したポリオ(小児まひ)に幼いころ感染した人が、四十～五十年たつて、手足の新たな筋力の低下や痛みに襲われる「ポストポリオ症候群(PPS)」。「頑張りすぎ」を避けることが、症状の改善や進行を遅らせるのに有効とされる。

(佐橋大)

藤田保健衛生大(愛知県豊明市)のリハビリ部門とポリオ友の会東海は、七年前から三回、会所属のポリオ経験者を対象に検診を実施している。大病院での二月の検診には、約三十人が参加。脚の筋力を測定したり、脚の負担を抑える補装具の具合を調べたり。神経や筋肉の負担程度を知る手掛かりとなる血清CK値を測定するなどした。結

ポリオ経験者の脚の状態を調べる医療スタッフ=愛知県豊明市の藤田保健衛生大病院で



果は後日、本人に通知され、受診のきっかけや日常生活の参考にしよう。PPSはポリオ感染による二次障害。ポリオは乳幼児に流行した病気で、一九六一年まで毎年数千人の患者が報告されていた。ウイルスで運動神経が侵され、手足にさまざまな程度のまひが残ることもあった。ワクチン導入などで激減し、八〇年を最後に自然感染の報告はない。

感染後、ウイルスで死滅した運動神経細胞に代わり、筋肉を動かすために別の神経組織が発達する。だが、その神経組織には常に過度な負担がかかる。PPS発症の仕組みは完全には分かっていないが、過度な負担で神経細胞の老化が早まり、それに伴って手足の筋肉が萎縮、筋力低下や痛みが生じると考えられる。同病院リハビリ科は、検診を経て外来受診した人に、筋電図などの精密検査をする。神経の残り具合を調べ、患者に合った運動の負荷を突き止める。沢田

## 「年のせい」勘違いも

光思郎医師は「人は運動が少なすぎると『廃用』といわれて体が衰える。PPSの人は運動が多すぎても『過用』で筋肉が減る。『廃用』と『過用』の間、ちょうどいい生活習慣になるよう助言する」と話す。体の部分によって神経の損傷状態は違う。状態の悪い部分を動かさすぎないよう、早めに補装具をつけたり、つえやエレベーターを使ったりするのも対処法の一つ。状態を確認し、軽い運動やストレッチを勧めることもある。

◇ ポリオ経験者の団体でつくる全国ポリオ会連絡会(神戸市)運営委員長の柴田多恵さん(五)によると、活動の結果、都市部の大規模病院のリハビリ科、神経内科などでは適切な診療を受けられるようになったが、情報格差も依然あり、「加齢のせい」と、逆効果となる過剰な筋力トレーニングを勧められる人もいる。ポリオ経験者は障害への差別的強い時代を生き、体にハンディを負いながら頑張り続けた人が多い。リハビリも「頑張りすぎ」になりがち。ポリオの経験も周囲に言いたがらない傾向があり、医師らがPPSを見

## 補装具活用を

検診を受ける人の状態はさまざま。愛知県豊明市の男性(七)は三歳で感染、十代から右脚に補装具をつけている。八年前に妻が入院し、毎日看病に通った疲れからか、急に左膝に力が入らなくなり、よく転ぶように。妻の入院先の医師が偶然PPSに詳しく、診断された。脚の負担軽減のため、左脚にも補装具をつけ、長い距離の移動は車いすを使う。「普段から無理生きている」「写真」を作成しすぎないように心掛けてた。日常生活に関する助



PPS発症時を「異常に疲れるようになった」「冷えがひどくなった」と振り返る人も。同県安城市の女性(五)は脚の状態悪化で七年前から補装具をつける。補装具があれば大きな不自由はなく、検診などで神経や筋肉の状態を確認しながら軽い運動を週一回続ける。沢田医師は「生きがい」を大事にしなが、体の良い状態が続くよう支援するのが医療の役割」と話す。

◇ 全国ポリオ会連絡会とは昨年購入者負担)。問い合わせは柴田さん(電話078(792)7471)へ。

### 取 前 線

「ホンネ外来」は患者や家族、医療関係者が医療現場での体験や感じたことを、それぞれの立場から語り合い、相互理解を深める欄です。〒460-8511(住所不要)中日新聞医療取材班。ファクス052522225284。下記の電子メールで。紙面では匿名ですが、干住所、年齢、職業、連絡先を必ず記入してください。中日新聞医療サイトでも掲載します。

### 親身な説明うれしい

左手の甲を骨折し、入れていた補強金具を抜く手術をすることになりました。義母の体調が優れず、子どもを長時間預けられない旨を病院に伝えると、主治医の先生は、軽い麻酔で短時間で済ませる処置があること、麻酔が切れて痛みが出るおそれがあることを説明し、私は処置を選択。処置中、先生は「麻酔は切れていませんか」「あと二本です」と声をかけてくれ、安心して処置を受けられました。氣遣いに感謝しています。(愛知県女性41歳)

## ホンネ 外来

患者診ずに画面見る  
肺と心臓を患い、三年前から二ヶ月に一度、通院していますが、初診以外、触診がありません。半年に一度、コンピュータ断層撮影(CT)やエックス線を撮りますが、パソコンを見て「変わりないです」と言うだけ。「苦しい」と訴えてもパソコンに「そんな時もありますよ」。その際は「患者は私です。私の顔を見て、胸の音を聞いて、触ってください」と声を荒らげてしまいました。顔を見て話してくれるだけで安心するのでです。(三重県男性51歳)